

まごころだより

2019.2月号

年末に富山でも地震がありました。被害はなかったものの、富山県は大丈夫という神話はもう通用しなくなっているのかもしれない。



私たちは2年以上も前から町内の役員の協力も得て、前にある合同庁舎を災害時の緊急避難場所として利用させてほしいと市に陳情してきました。それに対して、この年末にやっと市の総務課から回答文書が届きました。それには『合同庁舎の避難場所としての利用の件につきましては・受け入れが困難という回答をいただいたところ。』と書いてありました。理由はわかりませんが、魚津市の総務課防災係は「合同庁舎は、災害時に介護施設の高齢者や地域住民に避難してもらっては困ると言ってきた」というのです。更に「余裕をもって避難できるように、避難準備・高齢者等避難開始を発令するので、それに従って避難して下さい。また、つばめ児童センターなら避難できるかもしれないから、自分たちで問い合わせして下さい」というようなアドバイスも書いてありました。



私は2年以上も待たせておいて「先方はダメと言ってきました」という、1か月もあれば出せるような回答をしてきたことに憤りを感じました。私たちの税金によって建てられた国の建物に緊急避難すらできないという

理由を聞き、開示するくらいの気概を、市民の命を預かる市の職員は持ってほしいと思うのです。緊急時の合同庁舎への避難は高齢化の著しい周辺住民の願いでもあります。この回答はどうも納得できるものではありません。自分たちの命を守るため、今後も関係機関への働きかけを続けていこうと思います。その一方で、念のため避難所としてのよつば小学校の状態も調べておかねばならないと思うようになりました。

これに関して調べてみると、平成28年に文部科学省の施設企画部から『小学校施設整備指針』というものが出されています。その基本方針に「小学校は地域市民にとってもっとも身近な公共施設であり、生涯学習の場としての活用や、老人福祉施設との連携、更には避難場所として役割を果たす施設としても機能するよう、バリアフリー化することが重要だ」というような文章がありました。また更に読み続けると「教育の場として、健常児と共に障がいのある児童のために設備を整える必要があり、障がいの有無にかかわらず児童が安全に交流や共同作業ができる設備を整えることが重要だ」というような文言もありました。肢体不自由児や病弱などに対応できるよう、車いす・補助用具などを使用することに対して十分留意するようにという記述もありました。具体的にスロープ、手すり、便所、出入り口、エレベーターなどの設置が挙げられています。小学校を障がいの有無にかかわらず共に学び交流できるようにバリアフリー化し設備を整えなさい。その設備の充実、地域の生涯学習の場、老人介護施設との連携、避難場所としての役割をも果たすことにもなるというのです。



よつば小学校の中を見学したことはないのですが、この春、統合事業によって新築された小学校ですから、これらの基準にのっとって建てられたものであらうと思われます。よつば小学校の正面玄関には階段とスロープがついており、エレベーターは給食を2階に上げるためのかなり大型のものが一基あり、非常の場合は人が乗こともできるということです。残念ながら階段にスロープはついていないようです。トイレは駅などにあるような誰でもどうぞという多目的トイレがあるかどうかはわかりませんが、聞いた話では洋式トイレでかなりゆったり作られているということです。

避難経路を考えると、避難場所となる体育館は2階です。正面玄関からいったん建物の中に入り、停電していなければ、エレベーターで2階に上がり、廊下伝いに体育館に

避難ということになります。仮に停電した場合、電源の
いらない階段手摺に取り付ける昇降機があるのかどうか、
確認の必要があります。実際、何が準備されていて、何
が足りないのか、一度見学に行く必要があると思っています。

世の中は『共生』に向かって進んでいます。障がいの
あるなしにかかわらず、同じ場で学ぶことを推奨し、国
も施設の整備を進めています。しかしそれはなかなか難
しいというのが現状です。例えば、肢体に不自由があり、
車椅子あるいはストレッチャー使用の場合、知的に障が
いがなくても、ほとんどの児童は支援学校に通います。
娘が小・中・高と過ごした12年間、そして現在教師をし
て8年目ですが、車いすの児童・生徒は一人もいないとの
ことです。私は30年間私立高校に勤務していましたが、
その間車いすの生徒は2人でした。『五体不満足』で有名

になった乙武洋匡
さん、去年1月にまご
ころだよりで紹介し
たストレッチャーで
生活しながら高校ま
で普通学校に通いつ
けた『バクバクっ子
の在宅記』の平本歩
さんのような例はほ
んとうに稀です。両
親の強い思いと周囲
の理解・協力があつ
て成し遂げられたも
のです。最近は発達
障がい話題になる



ことが多く、障がい児に対する理解も広がってきました。
支援学校ではなく普通学校の普通級あるいは支援級への
就学を望む父兄も増えています。障がいのある児童を受
け入れるときには、職員配置だけでなく、設備の問題も
でてきます。しかし、一人ひとり違う障がいの子供たち
を地元の小学校が受け入れることによって、教育環境は
整っていきます。そしてその教育環境の充実、障がい
者のための設備が健常者にとっても便利であるように、
健常児にもプラスとなります。「共生」広がりによって、
いい環境が出来ていくのです。受け入れたいのだが、設
備が整っていないから・・・と断っているのは、いつまでたつ
ても改善はなく、進歩ありません。排除するのではなく、
課題があってもそれを解決するための方策を考えて
受け入れる。それが今教育界で叫ばれている「生きる力」
の実践であると思います。

よつば小学校は色々な障がいのある子供たちが『共生
する』そんな学校になってほしいと思います。それが、
災害が起きたとき、高齢者も障がい者も安心して利用で
きる避難所へとつながっていくのだと思います。

家族の介護について考えます

今回は母の事をお話したいと思います。母は今年で96
歳になります。少し歩行が不安定な他はいたって元気な
人です。生まれたところは能登半島の山間の農家で10年
ほど前までは一人で気ままに暮らしていました。ですが
歳をとるにつれ、住み慣れた家が母にとって非常に危険
な場所になってきたのです。農家の作りをご存知の方は
知っておられるかと思いますが、土間から部屋へは段差
が高く、日に何度も上り下りしなければなりません。増
して足の悪い事もあり転げ落ちる事もしばしばありまし
た。私達は度々同居してくれるように説得しましたが、な
かなか応じてもらえませんでした。しかし家自体が危な
い場所になって来ている事や生活用品を調達するにも不
自由することを理由にしてようやく同居する事を承知し
てくれました。さて同居が始まりましたがその生活に慣
れるのには時間がかかっています。いまだに慣れたとは
言いがたく、辛い日を送っている状態です。

その原因の一つは「婿」のようです。同居を始めてか
なり月日経っているにも関わらず、「世話をかけて申
し訳ない。私はさらし者だ」と言います。私は「そんな
に気をつかう相手ではない、世話になっても迷惑をかけ
てもよいではないか、親子なんだから」と諭しますが、
母の性格なのでしょう。その時は理解を示してくれま
すがまた以前のように戻ってしまいます。実の親子であ
れば喧嘩や文句も言えるでしょうが、婿との同居はまた
別なのでしょう。身体は衰えていますがしっかりした
方なので、この齢での心痛は気の毒になります。何かい
い方法がないかと考える毎日です。



おなじみ新聞紙で作ったバッグです

2月の行事予定

- | | |
|--------|------------------|
| 5日(火) | 惣菜またはお菓子づくり |
| 7日(木) | ハーモニカに合わせて歌いましょう |
| 14日(木) | かわいい小物づくり |
| 15日(金) | 林夫妻の歌謡ショー |
| 20日(水) | ピアノ伴奏で歌いましょう |
| 27日(水) | おしゃべり・にぎやか食事会 |